

通信陸上大阪大会 (7/6・7 長居) RESULTS

<男子の部>

1年100m 森田 13:44 (-0.6)

3年100m 岩下 11:66 (-0.4) <準決勝> 11:59 (+1.8)

<決勝> 11:70 (-1.7) 7位

共通200m 白石 24:78 (0) 木下岬 24:86 (+1.7)

川城 24:90 (-0.8)

1年1500m 奥村日 4:39:28 島口 4:47:51

<決勝> 島口 4:32:28 2位 奥村日 4:34:65 3位

島口、奥村日、近畿大会出場決定

共通1500m 松本大 4:28:52 名畑 4:41:39

共通4×100mR A (西田・岩下・木下岬・白石) 45:20

B (大井・樫本・瀬戸・伊藤) 47:86

<決勝> A (西田・岩下・木下岬・白石) 45:60 6位

共通走り高跳び 奥村尚 1m65

共通走り幅跳び 村北 5m69 (0)

共通砲丸投げ (5kg) 東山 9m09

共通四種競技 神原 2218点 7位

110YH 16:43 (-2.2) 685点 砲丸投 (4kg) 9m04 428点

走高跳 1m65 504点 400m 57:27 511点

<女子の部>

1年100m 西川 14:29 (-0.3)

山本光 13:43 (+2.0) <準決勝> 13:53 (+1.4)

<決勝> 13:45 (0) 3位 近畿大会出場決定

2年100m 畑中 13:09 (+1.9) <準決勝> 13:10 (+0.3)

<決勝> 13:19 (-1.2) 4位

3年100m 山本祐 12:55 (-0.9) 全国大会参加標準記録突破、全国大会出場決定

<準決勝> 12:58 (-0.6) <決勝> 12:68 (-2.1) 2位

共通200m 山元 27:22 (+1.8) 谷田 28:26 (+2.9)

森定 28:15 (+1.0)

共通800m 梶山 2:33:28 美濃部 2:37:64

共通1500m 木下茜 5:03:25 高橋 5:07:04

共通100mJH 村上 14:68 (+1.9) 全国大会参加標準記録突破、全国大会出場決定

<準決勝> 14:62 (+2.0) <決勝> 14:83 (0) 6位

棚江 16:11 (-2.5)

共通4×100mR A(谷田・山本祐・山元・村上)50:16

B(緒方・大島・松尾・平岡)53:66

<決勝> A(山本光・山本祐・山元・村上)49:73 3位

走り高跳び 岡本 1m40 永山 1m35

通信陸上大阪大会を振り返って

- プログラムの表紙には『IAAF 世界陸上大阪大会開催記念 第59回全日本中学校通信陸上競技大阪大会 兼 第68回国民体育大会選考会』と、この大会の正式名称が書かれてある。長居のビッグスタジアムで開催される、大阪中学生アスリートの夏の祭典とも言える大会とも言える。全国大会参加標準記録突破を目指して、ガチンコ勝負は実に見応えのある大会となりました。大型の電光掲示板に「おめでとう！全国大会参加標準記録突破!!」の文字が映し出される度に、メインスタンドから起こる拍手と大歓声はまさに選手にとっては上から降ってくるような迫力だったことでしょう。大阪中学新記録が3種目、大会新記録が6種目と、日本一を十分狙える記録も続出して、大阪中学陸上のレベルの高さを再確認する大会ともなりました。
- 大会初日。競技開始は10時00分。100mJH 予選開始。記録上位者で固められた8人のスタートリストを見ると、この最初のレースから全国大会参加標準記録突破者が続出する可能性が十分であった。3レーンに村上。すでに14秒74の記録を持っている。標準記録は14秒85。「予選の1本目で突破しておきたい」思いは顧問も選手も同じ。目まぐるしく風向きが変わる吹き流しを見つめながら、祈るような気持ちで村上を見守った。運命のピストルが鳴った。8人が高度なアプローチの技術を見せた。体の軸をまったくぶらすことなく、素早い動きのリード足で次々とハードルを越えていく。1着、7レーン豊中14中の中司選手、昨年のジュニアオリンピック優勝の貫禄を見せて14秒16の大記録が出たことをゴールタイマーの数字が示している。おそらく、今シーズンの日本中学ランキングトップの記録ではないか。すぐに、第2曲走路のサイドスタンド上方にそびえる大型画面の電光掲示を見上げた。『ハッパウ (判定中)』の文字で速報が標示されるのだ。『2(着) 236 カハラ イケ ハラコ 14:59(14秒59)』そして、3段目。『3(着) 242 マカミ ミキ シノム 14:68(14秒68)』風は追い風1.9m。メインスタンドから拍手と歓声が舞い降りてきた。村上の全国大会出場が確定したのだ。すぐに走り寄って握手した。「おめでとう。よくやったな。でもまだまだ通過点。全国でファイナルに残ることを目指そ



う！」と声をかけた。笑顔でうなずく村上、結局、この1組で何と6人、2組で2人が標準記録を突破したのだ。「競技を開始してわずか3分で標準記録突破者が8人も!？」本部席にいた役員や顧問が顔を見合わせて苦笑した。「大阪中学陸上 強し！」の印象を再認識した結果となる。続く準決勝では突破者がさらにひとり。次の大阪中学選手権でもまた突破が増える可能性もある。信じがたいことだが、大阪の女子ハードルは全国大会に行くことよりも、大阪の決勝に残ることの方がむずかしいことになったのだ。17時55分。共通女子100mJH決勝。午前中にきまぐれであった強風も今は落ち着いている。準決勝で自己記録を14秒62まで伸ばした村上は順当に決勝進出、シードレーンの7レーンに入っている。当然のことながら、全員が全国大会出場を決めている。隣の6レーン中司選手は全中の優勝候補筆頭となる。スターターのピストルにするどく反応。1台目のハードルを真っ先に超えたのが村上。レベルの高い競り合いとなった。ところが村上が7～8台目でハードルに足をぶつけわずかに失速した。14秒83で6位。今までの経験の少なさが露呈したのかも知れない。大阪大会で決勝に残ったのは初めてのこと。1年生のときは100m15秒台の選手で、1年リレーのメンバーにも入っていなかったのだ。晴れやかな表情で表彰台に上がる村上を見ながら、今回の6位という結果が残念に思えるような選手に成長したことを実感した。目標は全国の準決勝でジュニアオリンピック参加標準記録の14秒40を突破して全国の決勝に残ることである。大会3日目、NHKの全国生中継で今年もまた東雲のブルーのセパレートユニフォームがアップで映し出されることを楽しみにしている。



- 12時50分。3年生女子100m予選1組。祈るような思いで8レーンの山本祐莉を見つめた。彼女の100mのベスト記録は昨年の9月のジュニアオリンピック挑戦記録会で出した12秒45。この種目の全国大会参加標準記録は12秒55。実はこの記録を今シーズンになって、祐莉は一度も突破したことがないのだ。それでも、やってくれるはずと信じてこの日を迎えたのだ。不安要素は風。朝から強風が吹き荒れて、風向きもところどころ変わっている。吹き流しの動きを見ながら、出発のときを迎えた。「ON YOUR MARKS」のスターターの低い声に競技場が静まりかえる。「SET！」の声で固唾を呑む。ピストルの音で8人の選手がいっせいにスタートを切る。祐莉のスタートダッシュの技術が冴えた。中盤まで隣の7レーンの西陵中の佐々木と互角の走り。今シーズンの佐々木選手は春先から絶好調で、何度も高い標準記録を上回る記録で走っている。佐々木選手がやや前に出る。ここであせらずに祐莉は自分の走りに徹したい。佐々木選手についていけば、必ず標準記録を突破できるはずだ。佐々木選手が真っ先にフィ

ニッシュラインを通過した。2着に祐莉。ゴール付近に接置された速報のデジタルタイマーの数字が『7 (レーン) 12:38 (12秒38)』と表示されると、どよめきと拍手が起こった。今度もまた大型画面の電光掲示を見上げた。「ハテイヤウ」の下には風力『-0.9 (向かい風0.9m)』と表示されている。少し不安がよぎった。2段目が表示された。『2 (着) 242 ヤマト ヲリ シン 12:55 (12秒55)』と表示された。参加標準記録ドンピシャの記録で、村上と同様、予選の1本目で全国大会出場を決めたのである。村上と同様、「おめでとう」と握手はしたが、互いにまだまだ通過点であることを確認した。祐莉は1年生のときに、奈良全中で400mリレーの準決勝を走っており、2年の千葉全中でも400mリレーで決勝で5位入賞を果たしている。これで3年連続して全中を走ることになる。自分の20年余にあたる指導歴の中でも、3年連続して全国大会に出場した選手は初めてとなる快挙である。100m12秒30のべらぼうに高いジュニアオリンピックの参加標準記録も突破して、ぜひジュニアオリンピックも3年連続出場を果たしてもらいたい。祐莉はその後、準決勝も向かい風0.6mの中12秒58、決勝でも向かい風2.1mの悪条件下でも12秒68で2位に入っている。大阪中学選手権でリレー3連覇を狙うことに専念できる状況になった。もちろん、選手権の100mで3位以内に入ることもクリアして近畿大会出場を決めることも大前提となる。



- 1年女子100m。この種目で3位以内に入れば、近畿大会出場が決まる。祐莉の妹、山本光菜里にとっては(3位以内に入ることが)簡単ではない状況であった。田尻中の坂野選手が圧倒的に強く、すでに12秒台を連発していた。5月から12秒台で走った1年生はこれまでに記憶がないので、今までで史上最強の1年生スプリンターであることは間違いない。この通信大会のエントリー時点での光菜里の高記録は13秒97。この記録は全出場選手235名の中で9番目の記録となる。2番手以降は僅差の記録が続き、3位以内に入ることもあれば、惜しくも準決勝落ちするのも紙一重の勝負となる。11時35分。1年女子100m予選。1組では坂野選手が圧倒的な強さを見せて、12秒89の速報で場内からどよめきが起こった。しかも、向かい風1.3mの悪条件である。2組に走った光菜里はスタートダッシュから先頭に出て、そのまま順当に1着でフィニッシュ。追い風2.0mの好条件の中、13秒43の自己ベストをいきなり出したことになる。それでも、安心できない状況である。記録上位者で固められた1組。向かい風1.3mの悪条件でも、坂野選手に続いて養精中の山田選手が13秒47、以下13秒55、13秒57、13秒59、13秒72、13秒73、13秒74、13秒74と僅差が続く。予想どおり、きびしい勝負となる。「準決勝には細心の注意でのぞ

むこと。2組3着+2の条件をしっかりと頭にたたきこむこと！」とアドバイスした。15時50分。いよいよ勝負の準決勝がやってきた。

光菜里は準決勝2組。予選の結果を見る限り、決して油断のできないメンバーが揃った。1組は追い風1.7mと風にも恵まれて4着の記録が13秒56と好記録が続出している。2組も同じように追い風が吹く保証はない。だからこそ、3着までに確実に入っておくことが大事である。5レーンに光菜里、その隣の4レーンには同じ玉島白川陸上クラブの中心選手であった養精中の山田選手。スターターのピストルが鳴った。低く飛び出した光菜里。1年生とは思えないスタートダッシュの技術を見せた。30mぐらいで頭があがり、そこから中間疾走。リキみもなく効率良く地面をとらえていた。終盤の走りも減速を最小限に食い止め1着でフィニッシュ。13秒53。山田選手が僅差で続いて13秒55の2着。追い風1.4m。「めっちゃくちゃいい走りができました！」光菜里も納得の走り。見事に自分の見立てとイメージがぴったりであった。「今のイメージを大事にすれば大丈夫。決勝のアップは必要最小限に留めること。くれぐれもやりすぎには注意すること！」と伝えた。

18時00分。1年女子100m決勝。風はずいぶん落ち着いてきた。暑さもいくぶんやわらぎ、近畿大会出場3名枠をねらう大阪1年女子のファイナリスト8名が勢揃いした。準決勝1組で光菜里の姉の祐莉の大会記録12秒81を更新した田尻中の坂野選手の力が抜きこんでいるが、あとは混戦。3位以内もあり、7~8位の下位入賞もありのルーレット状態である。スターターのピストルですどく反応した8人のスプリンター。中盤まで7人が横一線の状況。坂野選手が真っ先にフィニッシュ。12秒68の大会新記録。おそらく日本の中学1年生で一番速いのではないか。後は順位がわからない。光菜里が顔を覆って泣いているのを見て、微妙な結果であることがわかった。やがて、正式記録が発表された。2着が山田で13秒43、3着に光菜里で13秒45が入った。4~7着は13秒5台。山本光菜里の近畿大会出場が決まった。彼女の舞台度胸に感服した。近畿大会では12秒台を狙わせたい。

- 1年女子100mで何とか狙いどおりに山本光菜里を近畿大会に出場させることができた。もうひとつ近畿大会出場を目標む種目があった。1年男子1500mである。この大会の前哨戦となる第4回記録会で奥村日向が4分39秒48で3位、島口が4分48秒63で7位に入っている。この結果で目標が明確になったのだ。2人には試験1週間前に入っても、必ず短時間練習させた。2人ペアであるのもいい刺激になってよかったのかも知れない。本音で白状すれば、3位以内にひとり、8位以内にひとり、2人とも表彰



台というのがイメージでした。初日の予選。1組の島口は4分47秒51の自己新記録でその組の4位、2組の奥村日向は終始、先頭集団を引っ張り4分39秒28のこれまたわずかであるが自己新で手堅く2位でフィニッシュ。きわめて順当に決勝進出を決めたのである。大会2日目。1年男子1500m決勝は16時開始。12時に阪急茨木市駅で待ち合わせをして1時頃、2人は競技場にやってきた。元気そうである。アップの仕方について細かく指示をした。15時30分、マラソングート下の選手招集所でレース展開について別々に呼んでここでも指示。スタート直前にも第2コーナーまで出向いて、またアドバイスした。「何が何でも近畿大会へ・・・！」という強い思いがあったのだ。予選は10組計223名の中から記録上位4分52秒77までの15名が決勝レースにのぞんだ。その15名のファイナリストに東雲のユニフォームが2人。もうこれだけで快拳とも言える。スターターのピストルが鳴った。近畿大会出場の3枚の切符を狙って、15名の選手が勢い良くバックストレートを駆けだした。接触して転倒することなくスタートが切れたのを見届けてまずはひと安心。10名前後の先頭集団を形成しながら400mを通過。73秒あたりか。先頭集団の中でも順位がめまぐるしく変わる混戦である。

奥村は2～3番手あたり。好位置をキープしながら、何度か先頭に出てレースを引っ張った。島口もしっかり先頭集団をキープしている。800mを通過。先頭集団の中でも出入りの激しいレース。奥村は結論から言えば、このペースの上げ下げで無駄な体力を消耗したことになる。裏を返せば、それだけ勝負に執着していたことになる。



予選通過記録が8番目の記録であった島口も先頭集団をキープしている。2人とも1年生とは思えない、魂のこもった素晴らしい走りを見せている。まもなく、ラスト1週の鐘が鳴ろうとするその時、島口が渾身（こんしん）のラストスパートをかけた。「ここで、トップに躍り出たのが東雲の島口くん！」と、アナウンサーが叫ぶ。ラスト1週の鐘を合図に大歓声がひときわ大きくなった。ラスト300m。島口は疲れた体にムチ打って、優勝にむけてピッチを緩めない。やや離れて5番手あたりに奥村日向。苦しそうに首を振る。第2曲走路あたりで7～8番手あたりまで落ちた。島口に目を映す。ホームストレートに入ってラスト100mで、先頭をキープ。



すぐ後ろに数人の選手が数珠つなぎになっている。ラスト30mあたりか、ここで誠風中の堀畑選手が前に出る。そのまま倒れこむように1位でフィニッシュ。続いて2位に島口。そのあとの光景に一瞬目を疑った。ゴール直前に、枚方二中の上原選手をかわして3位で奥村日向が飛びこんできたのだ。1着4分32秒11、2着島口4分32秒38。わずかにその差が100分の27秒。3着奥村日向4分34秒65。4着との差もこれまた100分の58秒の僅差。ゴールした選手がバタバタと倒れていく壮絶なレースとなった。近畿大会出場を賭けた奥村の粘りに舌を巻いた。東雲中学が近畿大会1年1500m出場枠3人の内、2人をゲットする快挙となった。「よくやった。おめでとう！」と、2人に声をかけると大粒の汗を流しながら、瞳がきらきらと輝いていた。

1年男子1500mの表彰式が始まった。晴れやかな2人の表情を見ながら、近畿大会での活躍に思いを馳せた。秋のジュニアオリンピック出場、来年は2年生で全国大会出場を目標にしたい。陸上の夢が無限大に広がっていく。今、彼らの夢の旅が始まったのかも知れない。

- 大会2日目15時30分。3年男子100m決勝。長居競技場の高速トラックで、大阪ナンバーワンスプリンターを決めるレースが始まる。8レーンに岩下。準決勝前には「大事なレース。風の条件に左右されないように着取り(2組3着+2)に必ず入れ！」と、声をかけた。その言葉どおり自己ベストの11秒59で3着に入り、見事にこの種目(男子100m)では東雲初の決勝進出を果たしたのだ。スターターのピストルで勢いよく飛び出した岩下。中盤までほぼ遜色ない走りを見せたが、後半になってやや先頭に離されたものの、リキみを最小限にいとどめて11秒70で7位入賞を果たした。向かい風1.7mという悪い条件でもこのタイムで走ることができるようになった彼の成長ぶりに目を細めた。表彰台にあがり賞状をもらう彼を見上げながら、「ここからが本当の始まりになるのかも知れないな」と思った。さらに上を目指して、陸上競技にとことん向き合えば、素晴らしい選手になることは間違いないはずだ。
- 四種競技に出場した神原が見事な集中力を発揮した。東雲新記録となる2218点で、これまた東雲男子としては初の四種競技初入賞となる7位入賞を果たしたのだ。彼の素晴らしいところは、この大会に向けて心身ともに万全の準備をやりきったところ。男子



四種競技は110mYH、砲丸投げ(4kg)、走り高跳び、400mを2日間に分けておこなう。今年になってレベルアップしたハードルではやや1台目のアプローチでバランスを崩したものの、向かい風2.2mの中でも16秒43と記録をまとめた。砲丸投げの9m04もわずかであるが自己ベスト。この2種目をやり遂げると、彼は記録の報告をして帰宅。後の彼の話によると、家に帰って夕方の6時

30分には寝たそうである。次の日は5時前に起床。朝の時間を先取りしながら、充実した時間帯を過ごした。2日目の最初の種目は走り高跳びである。1m60まで順調にクリア。彼の自己記録タイである。「次の1m65を跳べるかどうかで大違いだぞ!」と、声をかけると「はい」と力強く返事、集中モードの表情でした。期待どおり1m65を3回目で見事にクリア。この種目でも自己ベスト。最終種目の400m。疲れがないと言えば嘘になるような状況でも、彼は前半から積極的に前半からスピードを上げた。ラストの競り合いでも見事なフィニッシュで逃げ切り、57秒27の記録にまとめた。彼の戦いぶりを見て、陸上競技はこうあるべきものだと再確認した。試験1週間前でもハードルのアプローチ練習をしたり、300mの刺激を入れたりして計画的に練習に取り組んでいた。かと言って、彼は試験勉強にも手を抜いていないはずだ。今自分の置かれている状況下で、いかに自分がベストを尽くせるかということのみに集中している。自分の力ではどうにもならないことには決して不平・不満を漏らさない。「試験勉強があるから……」「時間がないから……」「暑いから……」などの言葉は決して言わないのだ。立派な選手である。

- 大会2日目。最終種目は共通男女のリレーの決勝種目を残すのみとなった。フィールド種目もすべて終わっており、フィールド内に置かれていたテントやセーフティマットも何もない。リレー種目のみのセッティングであり、会場にいるすべての人がこのリレーに注目するのだ。まさにスプリンターにとっては至福の瞬間となる。この大会の参加標準記録を突破して出場したチームは男女それぞれ150チーム。その中から8チームだけに用意されたステージとなる。男子は予選で45秒20の今シーズンチーム新記録、東雲歴代2番目の記録で決勝に残ったのである。決勝レースではややリキんだところもあったが、それでも45秒60で6位入賞した。新北野、咲くやこの花、蹉跎(さだ)、豊中三の強豪チームの一角を崩して、次の選手権では3位以内に入って近畿大会出場を狙いたい。

女子の決勝レースでは西陵が48秒99の記録で完勝した。東雲は第1走者に1年生の山本光菜里を入れる新オーダーでのぞんだが、今シーズンチーム新記録の49秒73で3位に終わった。大型映像の正式結果を見上げて、わかっていたこととはいえ、驚愕(きょうがく)した。5チームが49秒台。2~3年前の全国大会決勝レベルである。全国随一のリレーの激戦区、それが大阪なのである。勝負は大阪中学校選手権。25日(木)17時50分の決勝レース。このレースで東雲ブルーのセパレートユニフォームが真っ先にフィニッシュして東雲3連覇(5回目)を果たしたい。そのことだけに集中して、大勝負のその時を迎えたい。今年も風を詠み、明日にときめき、夢を賭ける決意である。

